90-21-9447

慶應義塾大学ビジネス・スクール

管理会計計算ノート

1 CVP 分析

X 社では，主力製品である A の収益性低下が問題になっている。A の収益性改善策を考える材料として，まずは A の損益分岐点分析を行なうことにした。過去の会計データを用いて回帰分析を行なったところ，A のコスト線は $y = 17,437,500 + 0.25x$ と推計された。ただし，y はコスト，x は売上高である。A の価格は 3, 750 円であり，来期は 6, 100 個売れるだろうと見込まれている。

【問】

1. 損益分岐点販売数量を求めなさい。
2. 来期，A が生み出すと見込まれる営業利益はいくらか求めなさい。
3. 以下の収益性改善策を実行した場合に，A が生み出す営業利益の額を求めなさい。
   (a) 製品 A を専門に取り扱っている 3 名の営業職員の給与体系を変更する。固定給を 1 人当たり年間 50 万円引き下げる代わりに，売上高に応じたインセンティブを導入する。インセンティブは売上高の 5% を 3 等分して 3 名の営業職員の成果報酬として支払うものであり，これによって，予想販売数量は 5% 増えると見込まれる。
   (b) 広告宣伝活動を行なう。2, 000, 000 円の固定販売費を支払って TV コマーシャルを行なうことで，予想販売数量が 10% 増加すると予想される。

この教材は，慶應義塾大学ビジネス・スクール専任講師　木村太一が，管理会計の計算演習用問題集として作成した。計算問題内の企業はすべて架空のものである。

本ケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールが出版するものであり、複製等についての問い合わせ先は慶應義塾大学ビジネス・スクールまで（〒 223-8526 神奈川県横浜市港北区日吉 4 丁目 1 番 1 号、電話 045-564-2444、e-mail:case@kbs.keio.ac.jp）。慶應義塾大学ビジネス・スクールの許可を得ずに、いかなる部分の複製、検索システムへの取り込み、スプレッドシートでの利用、またいかなる方法（電子的、機械的、写真複写、録音・録画、その他種類を問わない）による伝送も、これを禁ずる。ケースの購入は http://www.bookpark.ne.jp/kbs/ から。

Copyright © 木村太一（2021 年 12 月作成）